

かまどに関する文化的考察

NPO薪く炭くKYOTO会員 吉田 好宏

「神はどこへいったのか？」 - 日本人の神に対する考え方 -

火は、私たちの暮らしに欠かすことができないものである。古来、私たちは火を焚くことの可能な独立した建物や部屋のことを「家」と呼び、一つの火を囲んで一緒に暮らす人びとのことを「家族」と呼んできた。カマドやイロリという家の中の火のある場所は、家自体やあるいはその家の神を象徴する場所でもあったのである。

自然の豊かな多神教の世界は、神は一つである必要はなく、多くの恵みを与えてくれる多くの神がいる世界である。古代ローマには三十万、いにしえの日本は八百万の神がいたといわれており、そうした神々の中には火と深い関わりを持っている神もいたのである。

しかしながら、今の私たちの生活空間には、神を感じる空間はほとんどいってなくなっている。昔は、家の中にたくさんの神様がいた。神の居場所があったのである。「土間」にはカマド神、荒神、火の神、「納戸」には納戸神（なんどがみ）、年徳神（とくとしがみ）、「ウマヤ」には厩神、「便所」には廁神（かわやがみ）といった具合である。こうした神は、明るいところではなく、少し暗いところ鎮座している。家の中の暗がりには、人間と神が共存する空間でもあったのである。しかし、現在の家は、明るすぎてそうした神を感じることでできる空間ではない。神はいったいどこへいったのか。今回は、カマドと人の関わりについて考えてみるというのが拙稿の狙いである。

さて、日本人の神のとらえ方は、近代以降と近代以前では全く異なる。近代以前は日本人にとって神と人とを明確に区別していない。神懸かりという言葉があるが、神に近づいた状態を表している。神は人の側にいるものであった。神という言葉は、近代以前と近代以後とではその使い方に大きな違いがあることは、自然という言葉にも象徴的に表れている。近代になって「Nature」という言葉が輸入されたときに、当時の日本人は困ってしまうのである。「Nature」の訳語には、明治30年ぐらいいに何とか「自然」という言葉が当てられる。ユダヤ教やキリスト教は、砂漠のような厳しい自然条件の中で生まれた宗教であり、そのため自然や神を人間と対峙するものとして捉えているが、日本語には「自然」と「人間」を分けるという発想がなかったため、仏教用語としての「自然（じねん）」（＝「おのずから」）という意味の言葉を当てられた。人間は自然と分けられるものではなく、神もまた自然と対峙するものでも峻別できるものでもなく、人と自然と神が一つの世界で暮らしていると考えていた日本人にとっては、自然を対象として捉える考え方は必要ではなかったのである。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの一神教は自然を人間に対峙する対象として強く意識する。自然を人間の外にあるもの対象と捉えて分析の対象とすることは、自然科学が発達する社会的条件としては有利である。そうでない世界は迷信に支配された前近代的な社会として烙印をおされ蔑まれるのである。日本人は、豊かな自然環境の中で、その自然と一体となって人間の上位に位置するまたは対置するものでない神と生きてきた民族なのである。カマドは生活のための用具という意味では、西欧社会との共通点もあるが、日本人の自然とりわけ神に対する考え方が色濃く表れているのである。カマドを語るには、日本の精神性や文化性を把握しないと正しい理解とはいえないので、この点については、筆者にとっては荷が重すぎるのであるが、可能な限りあぶり出すことを試みることにする。

火と人間の歴史

人間は火を使う動物である。火は、食べ物の煮炊き、暖房、物の加工、信仰など様々な用途に使用される。今でも世界の多くの地域では、薪を集め火を焚いて暮らしている。しかし、私たちは、その周辺で、火の恩恵に浴しているにも関わらず、実際に火を見ることは、少なくなっている。そのせいか、近頃の日本では薪に火もつけられない子供たちが珍しくない。大きな薪にライターで火をつけようとする子供、新聞紙を着火材にしようとしたどり着くのはましな方で、火がつかないと灯油をかけて火をつけることを考える子供もいるくらいである。子供に火遊びをさせないことは、大事なことであるが、あまりにも火から遠ざけようとしているくらいもあり火の記憶が適切に次世代に引き継がれるのか返って心配である。

さて、火と人間の関わりは古くおよそ600～700万年前にサルから分化した人類の祖先は、色覚の発達により火を認知できたといわれている。火を認知できた人類の祖先は、山火事からも安全に逃げることができ、山火事などで逃げ遅れた動物の肉を食べることもでき、そこでの肉食が人類を進化させたといわれている。屍肉食による食中毒の危険が軽減されたこと、柔らかい肉を食べることにより顎が小さく頭蓋が大きくなり、脳が発達したのです。火は人類の進化にも大きな影響力を持っていたのである。

そうした火は、人に便利さや豊かさを与えてくれる反面、人の命を危険にさらすものであったために、呪術的な目的に用いられたり、精神的に重要な意味をもっていたりして、そのことも現在まで引き継がれている。現代では火に対する風習は、弱くなっているが、おけらまいるの火、毎朝の清めの火、盆の迎え火、送り火など周りを見ればいくらでもある。

火がサルを人に生物的に進化させただけでなく、人に豊かさと危険も与え、生活だけでなく文化や精神的にも大きな影響を持っているのである。

火と神に関する記憶

古来、人が自分以外に意識した対象は、山、水、火、太陽、大地、風などであろうが、山や自然の恵みを食べられるようにしてくれるものが「火」であり、「山」は、「火」と関係の深いものである。「山」と「火」の関係で思いつくのは、まず火山や山火事であろうが、前に述べたように人間を創り上げた要素の一つが火であり、古代から現代に至るまで火なくしては我々の生活は成り立たない。「山」は、狩猟採取が中心の縄文時代においては、木の実、山菜などがある山は食料の宝庫であり、焼き畑に見られるように山の斜面を焼き払えば畑になるし、灰などからミネラルなど肥沃な土が手に入り比較的簡単に穀物や根菜類などの作物を栽培することができる。「山」は、人間に食べ物を恵み与えてくれる母のような場所でもあったのである。山の神が、多産な女性神のイメージでとらえられるのも、そうした理由からであろう。山の神といえば、醜い女性の神であるとされ、女性が入ることを嫌うとされている。これは昼なお薄暗い森に女性が入ることを止めるために後世に作られた物語であろうと思われる。

また、人は死ぬと現在では火葬にするのが一般的であるが、昔は土葬である。そして死体を埋める場所は、山の近くの山麓や野原である。平安時代に作られた都である京では周辺の七野といわれるような化野、北野、紫野、蓮台野などといった場所である。今でこそ、住宅地になっているが、昔は埋葬地であったことは、わずかに残る寺院の存在から図り知ることができる。人が死んで魂が体から抜け出て山頂に登っていく、そして長い年月をかけて山の神になるというような考えが生まれてくる。これは、仏教の影響を受けて「山中浄土観」という考え方に発展するが、お盆に帰ってきた霊を再びあの世に送る大文字など京都五山の送り火もこうした考え方に起源を持つものとも考えることもできる。ここでも先

祖の霊を山に送るために送り火といった火を使う。山と人、火は、それを結ぶものとして欠かすことの出来ないアイテムなのである。

さて、話を「火」に戻すことにする。火は、人間の暮らしを豊かに発展させてきたものであり、火に対する感謝とおそれの気持ちは、世界で共通している。人は、火に人知を超える力を感じ、そこに神を見いだす。火の神には、火難から守護を祈る火伏せのほかに、家族の守護神、作物の豊饒を約束する作神などの性格が与えられている。

ユダヤ教やキリスト教といった一神教では、この世界の全てが全能なる唯一の神が作ったものであるが、古代ギリシャでは、日本と同じく多神教の世界である。火は、人間のために火を盗んだプロメテウスが授けたものとし、ゾロアスター教は、火そのものを崇拜の対象としている。

日本神話では、火は女性の体内から生まれており、神と人を明確に峻別していない考え方がここにも現れている。人間の生命力が神の力を結びつけて考えている。日本書紀では、イザナギとイザナミの2人の神が日本を誕生させ、また、多くの神を生むのであるが、イザナミは火の神カグツチを生んだためにヤケドをおって死ぬと書かれている。イザナミの体の中には、もともと火があり、それを取り出すことで火の神カグツチは誕生したことになる。これは、昔の火起こしのイメージが投影されていると考えられる。摩擦は火を取り出すための手段、火きり杵で火を取り出した結果、火きり臼の摩擦した部分は焦げてしまうという火おこしのイメージが、話の根元になっているようである。ただ、日本の神話は、征服者によって作られたエリート神の物語である。それまでに存在したあらゆる神々たちが天照大神という征服者が信仰する神のもとにもともと地域にいた神々再編されていったのである。ただ、興味深いのは、征服者はそれまで存在した神を否定せずに、それらの神を物語の中に取り込んでいったというのが、日本の特徴とも言えると思う。こうした特徴は、その後、ときの権力者に逆らったり排除された者でさえも神として祀るという外国から見ると不思議な文化を創り出している。そのことで日本には、土着的・自然発生的な神が存在し、それらは完全に否定されることなく征服者の神の中に生きることができたのである。

その結果、火の神は、イザナミの生み出したカグツチ以外にも土地に土着していた神と強く結びつけられるものだったと考えられる。土着神とは、その土地に土着している激しい霊威・神威を持つ神霊、家の守護神、作物の神である。土着神は、その土地を守り、恵みと災いをもたらす神で、総称としては「荒振神」(アラブルカミ)などとして捉えられている。この土着の神で屋外に祀られるのが山の神、屋敷神、氏神などの地荒神であるのに対して、屋内に祀られるのが中世の神仏習合のときに火の神やカマドの神として祭祀される三宝荒神である。一方でカグツチは、火の神として愛宕山などに祀られていますが、日本全土を支配するに至らず、カグツチのみを祀るという神社はなく、イザナミなど他の神もたくさん祀られている。

まとめてみると、日本では自然と人間そして神は明確に峻別されておらず、共生しており、火に関して統一された信仰を形成されていない。そしてカマドについてもそれらの神と結びついており、征服者の神である火の神カグツチとの関わりよりも土着的・自然発生的な神と強く結びついていると考えられるのである。

「カマド」とは

洋の東西を問わず、食事には食物の調理に使う火が必要で、そのためには調理設備がなければならぬ。はじめは粗末な住居の中の火のある場所は、やがて焼いたり煮炊きをしたりする設備として発展していく。西洋では、煮炊きをするカマドの他に、パンを焼くた

めのパン窯などもあるが、調理設備はそれぞれの食生活や文化に応じて発展している。日本のカマドは、米を主食とするアジアの民族が主としてそれを調理するために作り出された設備である。

カマドは、火を焚く部分の上に鍋、釜などをかけ、下から火を燃やして、燃料の無駄と煤を防ぐように工夫された設備である。カマドの発明によりエネルギー効率もよく、すくない燃料で煮炊きができるようになった。カマドの素材は、土を練って藁などを加えたもので成形するが、火を燃やす中は空洞で、火のあたる部分に鍋、釜をのせる穴がある。鍋や釜の底が丸いのは、料理の熱をその中心まで均等に行き渡らせるためである。また、排煙のための煙管があり、燃焼を促進し、調理者が煙を避けられるようになっている。近代になってからは石、煉瓦、鉄、コンクリートなども用いられ頑丈な物になっており、風呂桶と合体させるなど様々な改良竈も考案されている。隣国の韓国ではオンドルという形でカマドが床暖房と一体的に使われている。

カマドに似た言葉に「窯」があるが、炭焼きや焼き物を製造する設備であり、火の当たる部分に釜や鍋をのせる穴は空いていない。

そして、カマドでは、鍋も使用できるが、専用のハガマとセットで使われるのが一般的である。釜は、主として胴部を支える部分が必要なカマド専用の調理器具である。釜も丸底で鍋の中央付近につばが張り出しているカマド専用の鍋の一種である。鍋は多用途調理器具であるのに対して、釜は米専用の炊飯用具である。つばが付いているのは、カマドの穴の縁に引っ掛けて釜が下に落ちないようにするため、米をうまく炊くための蓋には木製で厚みがある重い物が用いられている。鍋も釜も熱効率を考えるともともとは丸底にしてあるが、鍋は弦(つる)や把手(とって)がついている。それによって鍋は上から吊したり五徳のような支脚を使うことでそれ住居以外の場所でも使える。

「鍋」の語源は、「な」を煮る「へ」といわれている。「な」は菜っぱやさかなの「な」で、「へ」は、食べ物を入れる器・瓶(かめ)を意味している。漢字が金偏であることから今日では金属の鍋しか想像できないが、もともとは、土器で金属加工技術の発達によりその素材が鉄などの金属に変わっていった考えられる。近代になっても主食である米を「鍋」で炊いていたところも多い。京丹后市久美浜町大向でも、大正の頃まで鍋を使ってご飯を炊いていたという記録があるくらいである。ご飯を炊飯するには、専用の炊飯器がなくても鍋でも十分なのである。

金属製の鍋や釜が調理に使用されるようになるのは、冶金技術の発達とも関わっているが、縄文・弥生・古墳時代以降の時代であろう。古い日本の家屋には、囲炉裏に鍋がかけられてあり、台所のカマドに「釜」が据えてある。ただ、日本でも北の方は、囲炉裏の上に鍋をつり下げる文化であり、南の方では囲炉裏に支脚が置かれ、その上に鍋が置かれるのが一般的である。

さて、イロリとカマドの関係であるが、イロリは漢字で囲炉裏と書いたりする。その原型は炉であり家の中で火を焚く場所である。四角い枠の木の囲みがあるなしにかかわらず、竪穴式住居の時代からその中心で火を焚いたことは、間違いないのでカマドよりイロリの方が歴史が古い。イロリとカマドの違いは、イロリが屋内の中心にあり、煙は家屋の上部に抜けていくように設計されているのに対して、カマドは家の中心ではなく、土間のような調理専用の空間に設置されており、煙を排出し燃焼効率を高めるために専用の煙管を持っていることである。そして、イロリでは大量調理には適さず、カマドは人が集団で生活するような大量調理をしなければならないところに適している。カマドの誕生は、稲作の普及により一定の米が社会に流通することにも関係していると考えられる。

カマドとイロリの発生については、柳田国男は、カマドとイロリが別々に発生したという2元的発生説を取り、和歌森太郎は、「炉(囲炉裏、地炉)」と呼ばれるイロリが発展

してカマドになったとするカマド変遷発展説の立場で、後者は、釜をかける炉でカマロがカマドになった説明する立場をとる。

余談になるが、京都には御釜師という職業があるが、これは、釜ではなく、お茶の釜を作る人である。お茶が文化となる以降の近世前後の職業であろう。もう一つ、同性愛者の男性を「おかま」というが、「おかま」は、その丸い形から尻(しり)の異名でもあり、転じて、男色にふける男。また、その相手のことをいうとある。まったくお釜が関係していないということも言えない。

「カマド(竈)」・「へっつい」・「くど」

カマドは、漢字で書くと「竈」である。竈という字は、上の部分の「穴」が煙突を、そしてその下の部分の「睪」が水虫(アオガエル)を意味するとされる。どうしてアオガエルかということ、それを犠牲にして火の神に捧げるといふことらしい。この中国語の音は「ソウ」であり、カマドという言葉は、漢字が起源ではない。その起源には諸説があるが、カマドの「カマ」は、「くぼんだ・曲がった」ところを示す古い時代の朝鮮語 [kama] が起源で、古い朝鮮語でも「カマ」は釜のこと、あるいは釜をかけるところを指すことから、カマドという説である。この説によれば、曲がったくぼんだカマ状になった場所あるいはカマ状の調理器具を使う場所がカマドということになる。これによれば、農作業に使う鎌も語源的には同じでカマとされる。カマドのドの方は、次の通り説明される。奈良の大和という土地は、古くは「山門」(やまと)と書いた。これは、「山へ入り立つ口」という意味で、次第に範囲を広げていく内部への入口のを指す言葉で、これと同じように港は「水な戸」で水への入口という意味になる。

カマドには、「へっつい」や「くど」という別の呼び方もある。京都では、カマドのことを「おくどさん」「へっついさん」と呼ぶこともある。この「へっつい」の起源は、家の火所を意味する「イヘ・ツ・ヒ」(家の火(所))であるとするもの、ヘツヒとは、家の霊「戸の霊」(へのヒ)のことで、「へ」はカマド、「ヒ」は霊(神)を示すとする。

もうひとつ「くど」は、火所(ひどころ)という意味で、ホドは、「火処」と書き、女性性器を現す古い日本語で、これが「ホド フド クド」に変化したという説である。炉の中心のくぼんだ火を焚く部分がクドである。また、カマドの煙管のことを、クドと呼ぶ地方があり、これがクドの起源であるとする説もある。

まとめてみると、「へっつい」や「くど」は、より古い屋内炉であるイロリから進化してきた言葉であるのに対して、「カマド」の方が新しいと考えることができる。

日本語の中でも、言葉としては「カマド」に関わる言葉が多く残されている。たとえば、家の単位として「ひとかまど」「ふたかまど」と数えることや財産家のことを「大カマド」といったり、「カマドが倒れる、カマドをヤブル、カマドをかえす」といえば破産のことであり、「カマドを分ける、カマドナリ、カマドヲタテル」は分家のこと、「カマド將軍」とは、一家の主人、権勢をふるう横柄な女房を指すのである。「へっつい」「くど」には、これほどの言葉は残っていない。カマドの登場によりカマドが家の中心を占めるようになり「へっつい」「くど」を駆逐していったと考えるのが自然だろうと思われる。

カマドの発生から発展

カマドの起源を遡ってみてみる。竪穴式住居の中にイロリ(炉)が作られるのは、縄文時代前期以降といわれている。炉の中で甕(かめ)を直において煮炊きをしたもので、甕(かめ)を安定させるために三点で支えられなければならない、ここにカマドの原点をみることができる。この三点支持のあるイロリは、「類カマド」といわれ、火の中心に三つの

石をおくことは、広く世界に共通している。沖縄では、カマドに三つの石を置く風習は今でも残っており、人の死などを契機としてイロリの中心に置く石を海から取ってきて取り替える。三点支持はカマドの原点であり、世界に共通し生活の中に文化として定着していったと考えてよいだろう。

5世紀頃になると竪穴式住居のイロリではなく、奥壁にカマドが取り付けられるようになる。初期のものは、壁に粘土の貼り付けたもので、しばらくすると煙道付きのカマドの登場も登場する。

6世紀後半になると朝鮮半島から伝わった素焼きの移動式かまど「韓竈」(からかま)の使用が主に祭祀用に使われたと考えられ、土器としても発見されている。



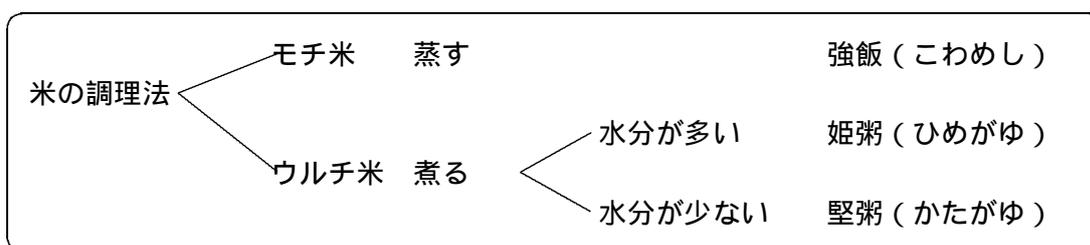
韓竈(奈良県忍海村出土)
狩野敏次「かまど」P13

12世紀頃、平安末期に描かれた「信貴山縁起」などに土カマドの絵が登場するので、韓竈ではなく現在のようなカマドが普及し、定着していったものと考えられる。

さて、カマドで料理する米の方からカマドを考えてみる。米の種類には、普段私たちが食べるウルチとモチがある。煮るのに適しているのはウルチ米であり、蒸すのはお餅にして食べるモチ米でといわれている。

もともとの米の食べ方は、水と一緒に煮るようなものであろうと思われるが、古墳時代でも米は煮て水分の多い姫粥の状態を食べ、特別な日にモチ米を蒸して食べていたといわれている。今日でもモチは特別な日ハレの日の食べ物ということになる。モチ米の方は比較的乾燥に強く、陸田でも栽培しやすいという性質もある。また、蒸した米を天日で乾燥させたものを糶(ほししい)というが、これは、携行食として旅行や野外での仕事に欠かせなかったものでもある。

カマドの登場は、こうした米の食べ方を大きく変える革命的な調理器具の登場を意味し、これが米の調理法に大きな変化をもたらし、姫粥から堅粥に炊けるようになりウルチ米の味が十分に味わえるおいしい食べ方ができるようになったと考えられる。



さて、次に住居の変遷からカマドを考えてみる。縄文弥生時代の住居は、伏廬(ふせいほ)といわれる竪穴式住居でこれは、穴を掘って柱を立て、上から茅をかぶせたもので、非常に簡単なものである。当時は金属器とりわけ鉄器も普及していないので家の柱になる木を切り倒すのも大変な作業だったと思われる。時代を経て鉄器が普及すると木の切り出しや加工がかなり容易になってくる。これによって木を組み合わせただけの小さな竪穴式住居ではなく、深さ40~50センチほどの柱穴を掘って、そこに自由に柱を立てて間取りを自由にとれる掘立柱住居になっていきます。竪穴式住居がほとんど定型なものであったのに対して掘立柱住居になって家がかなり自由に建てられるようになり間取りの自由度も高まる。奈良時代になってこうした住居には、外壁として板壁や土壁が取り付けられるようになるが、カマドが発見されない。また、お米は姫粥の状態でもイロリでの調理が主流だったのかもしれない。そのイロリで使われたのが三点支持の石などから発展したクドコである。クドコは鉄製の調理補助具でイロリの火の上に置き、この上に土器や鍋

をにおいて煮炊きに利用された。その語源は、カマドの古い呼称であるクドがイロリを起源としイロリの中心がクドと呼ばれていたとは先に述べたが、そこで使用する鉄製の調理補助具は、クドの子と言われるようになった。漢字では竈子が当てられているが、これは後につけられたものである。クドコは今日の五徳とほとんど同じものであるが、これが、茶道の影響を受けてクドコといういい方を嫌い、逆さまに呼んであるいは訛ってクドコがゴトクになり五徳の字が当てられたと思われる。もっとも語源には、実際に徳を並べる説もあるが、後世につけられた印象が強い。

さて、中世ではまだ多くの人の主流の食べ方が粥か雑炊で、通常の煮炊きには、このクドコを使用していたことが、カマドが発見されない理由であるとされる。すなわち中世はクドコの時代で、これが鎌倉時代から室町時代にかけて強固な定住基盤が確立され、クドコの時代から土カマドの時代へと転換していくのである。こうした定住基盤が強固な時代になって調理場には、いくつものカマドが並ぶ家が登場する。

ただ、カマドの発達には直線的ではなく、移動用カマドとして祭祀用の韓竈(カラカマド)が炊事用のカマドに転用される、さらにこれが持ち運びが便利で機能的にも完成度が高い「置カマド」になる。近世カマドの改良は、都市の発達とも結びついている。

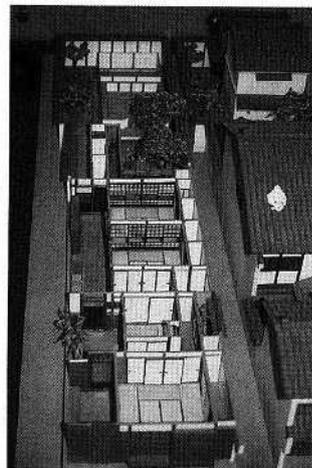
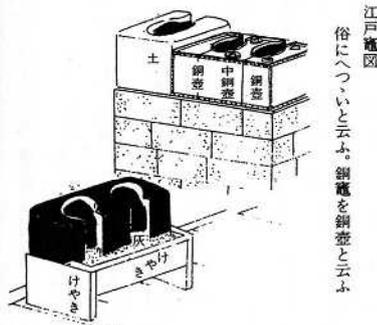
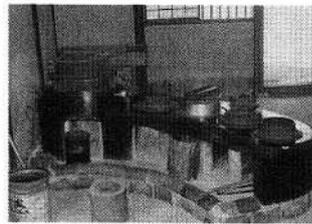
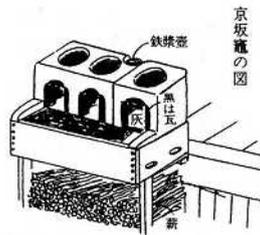


置カマド
(「百人女郎品定」より)

狩野敏次「かまど」P74

江戸は地価が高く、住宅面積が狭いため、煮物などには別に石竈(いしかまど)と呼ばれる七輪(シチリン)が用いられた。七輪は、韓竈の伝統を受け継ぐ移動式カマドで、燃料に木炭を使い、熱効率に優れ、炭価わずか七厘ですむことがその名のいわれとされている。江戸時代には、スタンダードなカマドの他にこうしたポータブルなカマドが発達したのである。これに併せて江戸周辺の農村で大量の炭が生産され江戸に流れこんだであろうことが想像される。

カマドのある台所での作業は、もともと座って行う作業であったが、都市という多くの人が分業しながら生活する空間の中で、効率や機能が重視され、座り作業から立ち作業へ変化していくのである。また、カマドが地面から分離されたことは、これまで神と大きな関わりを持ってきたカマドがその関わりを薄めていったという意味でも民俗学的に大きな変化といわれている。



右上：五つべつつい(奈良県旧白井家)
 右下：京の町家の模型。左側が通りニワ
 (日本民家園)
 左：カマドの図(『近世風俗志』より)

狩野敏次「かまど」 P80

一方、農村ではスペースもあることから土から切り離されず、土カマドが広く普及する。畿内では、家族や使用人の数に応じて大小のカマドが発達し、火口が3個ある「三つべつつい」それ以上の「五つべつつい」「七つべつつい」などと呼ばれるカマドも登場する。小さな家でも複数のカマドがあり、そのカマドには、羽釜だけでなく、茶釜、平釜なども使用された。ツバといって釜や鍋の置く大きさを調整するものもあった。

こうして、明治時代になるとカマドはさらに改良を続けられ、タイルや泥、粘土を材料とし、焚き口のの前には灰を掻き出す工夫が施されたり、カマドの下には、薪や炭を収納できるようにしたりする。それでも日本の台所は、西洋の明るいキッチンに比べるとじめじめして暗いので、1950年代になると生活改善運動が起こり、台所の環境を改善しようと炊事場改善組合が作られ台所の近代化が進んでいくことになる。

カマドというその当時では時代の最先端の技術が、広く社会に普及し改良を重ねられ、それでもいつの間にか時代に取り残され前近代的なものになっていったというのは、あらゆる発明や技術の運命とはいふもののおもしろいものである。

世界のカマドの神

それでは、世界にはどんなカマドの神が人と生活をともにしてきたのか、ここで少し述べてみる。

ギリシャ・ローマ

キリスト教がヨーロッパ世界を支配する以前には、ギリシャも多神教の世界であり、日本にも共通する神のとらえ方が見られる。ギリシャ・ローマのカマドの神は、ヘスティア(Hestia、Vesta(英))と呼ばれる。ゼウスの姉であるからかなり重要な神である。アテネやアルテミスと同じ処女神で、家庭を象徴し、カマドに祭られ、食事の前後に祈りを捧げられた。ギリシャ・ローマ世界でもカマドは、火への崇拝を背景にして家の中心であったため家のシンボルとしての意味をもち、結婚式は、花嫁をその父の家のかまどから、花婿の家のかまどに移すことを意味したのであり、新しく買った奴隷も、カマドの所へ連れて行くことによって家族共同体の一員となるとされた。

ドイツ

ドイツでも、カマドに関しては、ギリシャに似たような習俗がある。花嫁が夫の家にはいると、夫やその母に案内されて、まずカマドの回りを三度回る風習がある。また、ケルンに伝わる童話で、人が眠っている間に家の中を片づけてくれるハインツェルのこびと（Heinzelmännchen）もカマドのそばから姿を現すというのもカマドが異界とつながるものであることを象徴していると考えられる。

中国

中国のカマド神は、自然神ではなく人に関わる起源を強調するという点では少し変わっている。昔、賢い妻を娶った男がいて、その妻のおかげで家は栄えるが、裕福になると夫が愚かな行いをするようになりついに妻が家を追い出してしまう。しかし、やがて夫の家は没落、夫は目も見えない乞食になって偶然元の妻が暮らす家に訪問し、親切にされ今までの自分の行いを恥じてカマドに身を投じて死んでしまいカマド神になるという話で多くのカマド神の話がこのパターンの変形である。この話が道教思想などと融合しているが、日本のカマド神がその土地や自然と結びついているのとは、少し性格を異にするようである。家の火所であるカマドにまつられるカマド神がいて、その神は、旧暦12月24日の夜に、その1年、家の中に留まって一家の者の行為の善悪を監察していたカマド神が、天上の玉皇大帝の報告に帰り、大晦日の深夜、その家に下すべき吉凶禍福を携えて再び厨房に降り、向こう1年一家を監察するというものである。

日本のカマド神

カマド神

日本のカマド神は、火や火伏せの神、農作の神、家族や牛馬の守護神、富や清明を司る神など生活全般に関わる神である。これは、山の神の影響かもしれないが、多産で醜い神であるという伝承もある。結婚に際しては、穢れを払い、婚家のカマド神の保護に入るため嫁いできた嫁は、カマドの回りを回って座敷に通されるというのも、世界に共通するものをもっている。

土公神

カマド神とはいわれませんが、中国道教の影響を受けている土地の神に、土公神（ドグウジン、ロックウサン等）と呼ばれる神が存在する。中・四国地方で厚く信仰されており、春はカマドにいて、夏は門、秋には井戸、冬は庭に移動するといわれる。

荒神信仰

荒神は土地の神が仏教と結びついたものであるが、さらにカマドにも強い関わりを持っている。荒神は、家や地域で共同で祀られ、崇りやすい荒ぶる性格とともに、祭祀者を庇護する強い力を持った神である。荒神は、仏そのものではないが、もともとその土地に住む神で不動明王、鬼子母神、大黒天などと同じように仏教の中に取り入れられ、仏を守る神として位置づけられている。仏教の経典「荒神教」に記述されており、その姿は3面に顔があり6つの手を持つ三面六臂（さんめんろっぴ）で描かれ、信仰する人はその威力により「七難即滅」「七福即生」、七つの災難がたちまち消滅し、七つの福がたちどころにやってきて、一切の苦悩から救われるとされる。屋内に祀られるのが三宝荒神、屋外に祀られるのが地荒神で、地荒神は、山の神、氏神、村落神などの性格ももっているとされる。火伏せの神としての性格を持ち、カマドの神様としても信仰を集め、一般の家庭ではカマドの上に祀られる。荒神信仰は、京都を中心に西日本で盛んである。京都市内には、

御所の東隣に荒神を祀る清荒神護浄院があり、京の七口の一つ荒神口は、その側の鴨川にかかった橋である。

ちなみに荒神に似ているものに庚申信仰（こうしんしんこう）というものがある。これは、道教に基づく思想で、人間には、もともと 120 年の寿命が与えられているが、人間の腹の中には、三尸（さんし）という 3 匹の虫がいて、「虫の好かない奴」というのは、この虫が嫌いな相手という意味で使われる。この虫が、庚申の夜、人が眠ると体内から抜け出して天帝にその人の罪過を告げに行く。すると天帝は、その人の寿命を短くしてしまうので長生を願うなら 1 年に 6 回ある庚申の日には眠らずに起きておくようにという道教の教えであり、庚申信仰は火とは結びついているものではない。

沖繩のカマド神

沖繩のカマド神は、「ひぬかん（火の神）がなし」あるいは、「御三物（うみつもん）」「御釜（うかま）」と呼ばれる。海から取ってきた三石をかまどの中心に置いたりすることや家族に死者が出ると取り替えることが行われることから、カマド神のイメージは、日本に近いと考えてもよいのではないかと思う。

東北のカマド神

日本の国内でも東北には、少し異なる火の神様がいます。火男（ひよっこ）である。カマドの火を吹く男の表情を面に写し取っているといわれるが、そのルーツの昔話のあらすじは、以下の通りである。昔、おじいさんとおばあさんが住んでいたが、山で作業をしていると大きな穴をみつけたので、危ないと思い薪を集めて埋めてしまう。帰ろうとすると神が現れみっともない顔の子供を押しつけられる。その子を大事に育てるが、いつまでたっても成長せず、毎日寝てばかりいる。おじいさんが火箸でひょいとおなかを突いてみると臍から金が飛び出し、おじいさんは大金持ちになった。ところが欲張りなおばあさんがもっと金を出せと強く突いたためついにはその子は死んでしまった。その子はおじいさんの夢に現れ自分の顔の面を家に掛けておけば家を守ることを約束する。その子の名前がヒョウトクで厳めしい面相の面であったが、それをコミカルにしたものが、ひよっこの面である。

京都のカマド神

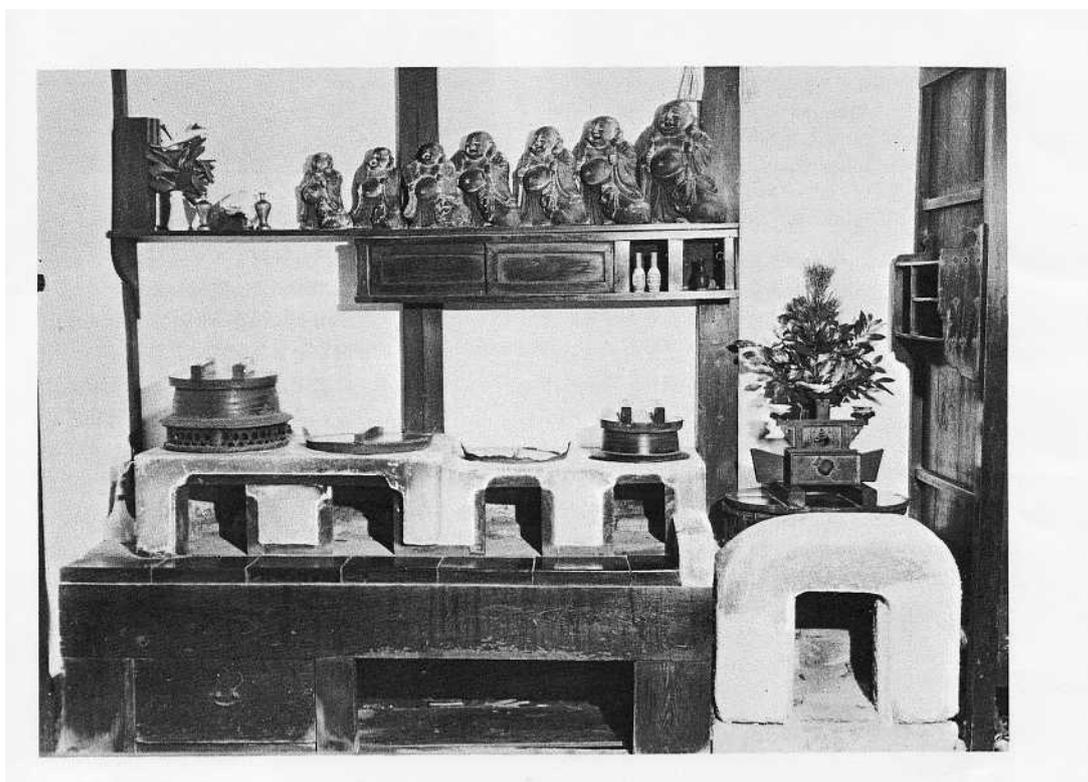
京都では、カマドのことを親しみを込めて「おくどさん」と呼ぶ。そのおくどさんに祀られているのが荒神である。荒神そのものとおくどさんのイメージが重なっている。おくどさんは、そのままカマド神を指し、煙管を通して家の内外を出たり入ったりするといわれる。

畿内では、荒神との結びつきが深いですが、普段使用しない大竈の上にマツヤサカキを供えて、「おくどさん」と呼んで信仰している。では、京都で「くど」を起源とする古い呼び名が残っているのかということは謎である。おそらく京都は、平安時代の都であることが影響しているのではないかと。平安時代になると独自の日本文化が発達し、朝鮮半島の影響を文化からも弱めていこうという大きな流れが起こってくる。人の名前もそれまでの朝鮮起源が明確になるようなものから日本的に変えられたりする。坂上田村麻呂は、「東漢氏（やまとのあやし）」の一族で「あや」からの渡来人であるが、坂上と名乗るようになっている。花も中国人が好む梅から桜が好まれるようになる。カマドについても朝鮮語を起源とするような呼び方から日本的な言い方に戻すと言うことがあってもおかしくないのではないだろうか。また、神道や陰陽道も盛んな地であったことから、そうした呼称が定着する要素があったのであろうと思われる。

さて、カマドに祭られているのは、荒神で、不浄を嫌い、それを犯すと激しく祟る気性の荒い神様とされている。荒神信仰は陰陽道にも深く関係しているようで、陰陽道の影響を強く受けていると考えることもできる。

京都ではないが、カマドと行事との関係で見ると、雪で作る「カマクラ」は、東北地方の正月の行事であるが、雪のない地方にも3・5月の節供には、「ソトカマド」、盆行事として「ボンカマド」と呼ばれる一年の特定の日に、集団で屋外で煮炊きをして、共に食事をするハレの日の行事がある。しかし、大晦日、店の主人から奉公人、出入りの者に至るまで臨時にカマドを作って大勢で食事をした風習は、「同じ釜の飯を食う」という言葉として残っている。これは、大晦日に八坂神社にお参りして「おけら火」を持ち帰り、その火で正月の料理をすると無病息災等という風習も「ソトカマド」や「ボンカマド」に原点を見ると言ってもよいのではないかと思う。

また、京都には、カマドに、布袋尊の土人形を年々揃えていき祀る風習もあり、日本では様々なものの考え方や途絶えてしまうことなく、独自に発展を遂げたり、吸収されたりしながら今日に至っていると捉える方がわかりやすいと思われる。統一的な姿でカマド神を描き出すことの方が困難なのである。



「京都府の民具 1 衣食住」P41 京都府立総合資料館

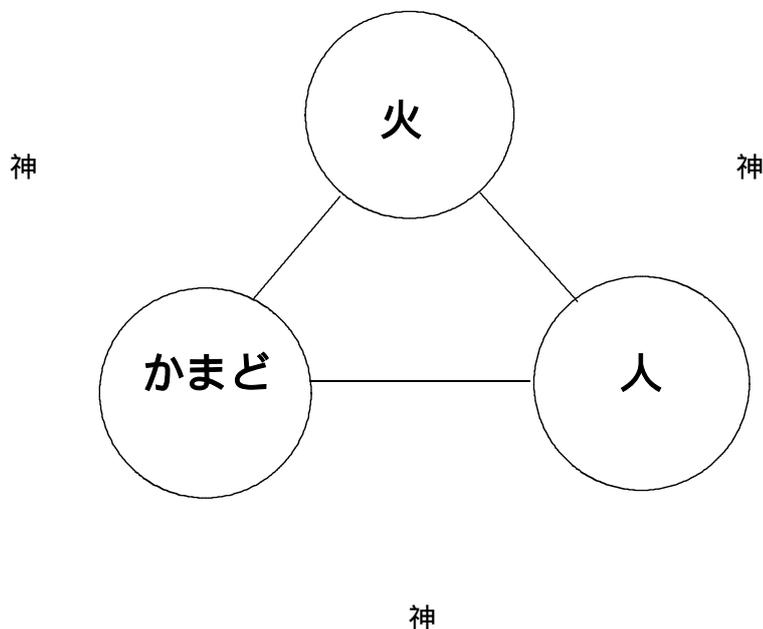
カマド神の特徴

世界に共通することは、祭祀者が一家の主婦であることである。料理を女性の役割分担とした社会では、カマドを祀る役目も女性にある意味で必然的な結びつきなのかもしれないと思われる。

日本のカマド神は、自然と強い結びつきをもっている。そのためカマドに関する神は、10月に神々の出雲集合にもいかず、家に留まり家族を守護するものとされる。土地との結びつきが強く捉えられているのである。

神と火と人、この3者の関係をどういう構造で捉えてきたと考えればよいか、人の意識構造の中に火やカマドという対象がある。それを繋ぐ物語として神が配置されている。

多神教世界の日本の神は、人の上位にあって人を導いたり見守る存在ではなく、人と共に生きているもので、事物や事象の背景に神が意識されており、神は、事物や事象の性格を現す状態であり、人と事物や事象を繋ぐネットワークの要素として考えると、カマド神についてもわかりやすいかもしれない。



異界とつながるカマド

カマドは、田植えが終わると稲苗を三束供えたり、稲刈りや麦刈りの際には、初穂を備える感謝の対象である。ただ、カマドは、闇がある。中に暗闇を抱えているその姿からか、異界とつながるものとして捉えられている。この世とあの世との境界が、そこにあり、カマドの穴が直接の入口とされるのである。

カマドに関わる風習などを調べると、異界と繋がる話がたくさんある。異界と繋がる話は死と結びついている。中国のカマド伝説の影響を強く受けているが、室町期の神道集の「釜神のこゝろ」では、カマドの後ろは死体を埋葬する場所としているし、このほかにもカマドのそばに死体を埋葬するという話はよくある。

- ・ 幼くして亡くなった子供やえい児の死体はカマドの後ろやその近くに埋葬する
- ・ 出産後の胞衣（えな）をカマドの後ろに埋める
- ・ 死者が出ると庭に臨時のカマドを作る。

また、異界と繋がるゆえに不思議な効果をもたらすというものもある。

- ・ 卑しい身分のものがカマドの番をしていて後に出世した。
- ・ 家に泊めてあげた人がカマドのそばで大便をしてそれが黄金に変わった。
- ・ 大晦日に火種を消してしまった嫁が死体を預かるという条件で火種をもらうと、翌日には死体が黄金になっていた。
- ・ カマドの上にもものを置くと鼻の低い子が生まれる（山口県）
- ・ カマドを修理すると兎唇（みつくち）の子が生まれる
- ・ 子供が泳ぎに行くときもカマドの炭を顔に塗っておくとカッパにおそわれない。

カマドが、そのままでは食べられないものを美味しく食べられるように変化させ、火を炊いている間はまばゆい光を放ち、消えるとそこには暗闇が口を開いている情景は、異界とのつながりを思わせるには十分なものである。

カマドと女性原理

カマドは、水を湯に、米をご飯に、生で食べられないものを食べられるものに変える。食べられるもの、有用なものを生み出す設備である。生み出すと言うことに注目されることにより女性原理と結びつく。女性原理あるいは母性原理と結びつくがゆえに、カマドはいろいろな恵みを与えてくれる山と共通するイメージを持つ。カマドは火の力を借りてモノが生まれる場所であり、その丸みを帯び中が空洞であることから母胎や子宮のイメージさせ、母胎・子宮のイメージする女性原理と結びついている。イロリの真ん中の火を焚くクボミが、女性性器に関連づけるのは多くの民俗に共通しており、イロリの中に置く3つの石、そのかたちである三角形は、古代インド、古代エジプト、古代ギリシャ、沖縄でも女性を意味するものとされる。

生命は、あの世からこの世にやってくるもので、女性自身はその扉となり、境界ともななって新たな命を生み出す。カマドは、熱効率を考えて丸く作られているその姿もイメージに重なるのである。

そのイメージのために「カマドの火を燃やすとき、女性器を見せると火は同性を嫌ってイブリだし、青竹を見せると勢いづく」などという俗言も生まれている。

カマドと水神信仰

火に関係の深いカマドは、同時に火と反対の位置する水とも関係している。カマドのカマが曲がったくぼんだところというイメージもあるが、平安時代カマドの「カマ」は、洞窟、淵、滝壺、火山の噴火口など異界への入口のイメージを持つ場所も「カマ」と呼ばれている。カマドを祀るカマド祭りは、水神祭祀は共通する要素をもつ。これは、カマドに似た地形に水神を祀ったのが始まり、そこでカマドを作って祭祀を行ったもので、これが、後に屋内化したとする。そういう意味で、カマド神と水神との間には深い関係をもち、カマド神は水界と関係を持つ神と捉えられる。カマド神的性格を持った河童は、河童の恩返しという昔話でカマドから出現し、カマドのそばに魚を置く、カマドの穴に住み着くなどという伝承もある。

カマドがしばしば火災を起こす原因であったことから、それを沈める意味で水神を祀ったと考えることも出来るだろう。水神信仰との関係も異界と繋がるものと併せて、火伏せの意味が込められたものであろう。

京都のおくどさんの今

京町屋のカマドは、通りニワに設置される。ニワとは、土間のことで、通りニワとは、京の台所のことである。台所にカマドや流しが並ぶのである。

農家にも複数のクドがあり、普段は小さなクドで煮炊きをし、おおきクドは、盆、暮れ、吉凶行事のとき大勢の食べ物を作るときだけに使われるが、京町家にも幾つものカマドを持つ家があり、その中でも一番大きいのは「飾りかまど」で、通り庭に作られるカマド（オクドサン）で正月3が日だけ神様にお供えをする雑煮をつくるのために使用し、普段は別のクドで炊飯する。

さて、現在の京都のカマド事情であるが、カマドでご飯を炊いているところはほとんど知られていない。やはり煙が出ることや火災の危険からであろうが、京都府文化財保護課

に聞いても、京都府内ではカマドでご飯を炊いているところは知らないとのことである。

文化財としての建物の中にカマドはあるが、火災の危険もあり使用しないようにしてもらいたいという考えである。それでも使うのは、お寺ぐらいしかないのではないかとのことだった。やはり現実的に京都の中でカマドを作って使うなどと言ったら消防などの関係でも大変なのであろう。

カマドがある家は、少なくなっているが、同志社大学の京町家キャンパス「江湖館」などでは見られる。

カマドの魅力

現代でもカマドの魅力は、決して失われてしまったわけではない。ノスタルジックなあこがれのような魅力もあるが、実利的な効用もある。カマドで炊いたご飯の方がおいしいのである。野外で飯ごうで炊飯したご飯がおいしく感じられるのは、一つは野外の空気のおいしさかもしれないが、人の炊くという作業が目に見えたり、自分が参加するということでおいしさを増すという心理的な効果もあるかもしれない。これからの飲食業は、おいしい食べ物を提供するということではなく、おいしい物づくりに参加させる機会を提供することに新たな道が開かれるかもしれないと思うのは、私だけだろうか。

さて、このような心理的効果以外にカマドで炊いたご飯はおいしいのは、科学的に理由がある。燃料にする柴などの小枝は、火力も調整しやすく、まんべんなく焚くことができ、おいしく仕上げられる。また、直火焚きのものについては、遠赤外線と近赤外線の組み合わせにより、素材のうまみを逃がさず焼けるというような効果もある。

カマドは燃料の節約にもなり、カマドを使わないものと比べると1/4の燃料ですみ、一度に複数の料理も可能で熱効率もよいのである。何よりも化石燃料ではなくバイオマスエネルギーなので温暖化の聞きが叫ばれる今日には、それを見直す意義は高い。

古来、京都は、バイオマスで支えられていた都である。そのために様々なシステムが作られていた。都の周りから薪炭を運び込むシステムもできており、その一つが大原の里から柴を運んでくる大原女である。京都周辺から京都へのエネルギー循環システムについては、いずれ稿を改めて述べたい。

むすびに

日本に入ってきたカマドは、米の食べ方に革命を起こしたに違いない。しかし、カマドは、近代技術のように神と対立することなく、日本人の考え方や暮らし方と調和しながらその一部となって溶け込んでいった。明治時代の日本人が和魂洋才の精神を唱えながら近代技術を受け入れようとしたのもこうした考え方の反映と考えることもできる。勝ち組か負け組かというような二者択一ではなく調和させながら受け入れていくという考え方は、現在にこそ必要なのではないだろうか。

現代人の生活は火から切り離されているが、日本はバイオマス大国である。豊富な雨量から山は放っておいても木が生えて森になる。日本は砂漠の国ではなく「後は野となれ山となれ」という国である、そのそんな国でバイオマスを促進しないのは、もったいない。

バイオマスの促進は、日本の農村を含む地域社会再生のキーワードの一つである。人と火とのつきあいについても、もう一度あらゆることについて原点に戻って火を見つめ直す必要があるのではないか。薪く炭く Kyoto 元代表の島田俊平君は「地域おこしは、火おこしから」と言って山に入って間伐や炭焼きを始めました。起こした火には多くの仲間が集まってきました。そうした取組が各地に必要な時代ではないかと思います。

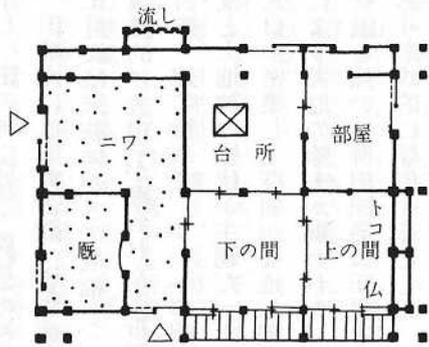
最後に今の家には、神はいなくなってしまうました。いるのは人間だけあるいは奥様だ

けかもしれません。奥様というのは、「いろはにほへと ちりぬるを わかよたれそ
つねならむ うみのおくやま けふこえて あさきゆめみし 糸ひもせずん」で山の上
にあるから奥様といわれるそうです。それで別名「山の神」なのです。家に最後に残る神様
を、ただ一つこの山の神だけになってしまいましたが、この神様が一番怖い神様という方
もいらっしゃいます。お後がよろしいようで。

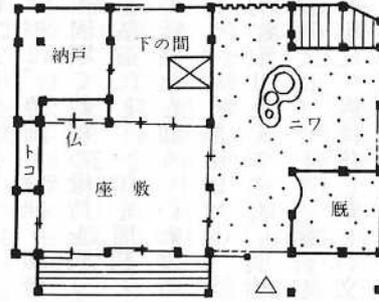
参考文献：

- 「ものと人間の文化史 かまど」狩野敏次 法政大学出版局
- 「ものと人間の文化史 鍋・釜」朝岡康二 法政大学出版局
- 「日本民俗辞典」吉川弘文館
- 「京町家づくり千年の知恵」町屋大工棟梁 山本茂
- 「京都の民具」1衣食住 京都府立総合資料館
- 「信濃の民俗」信濃毎日新聞社
- 「焚き火大全」中川重年ほか

< 参考資料 >

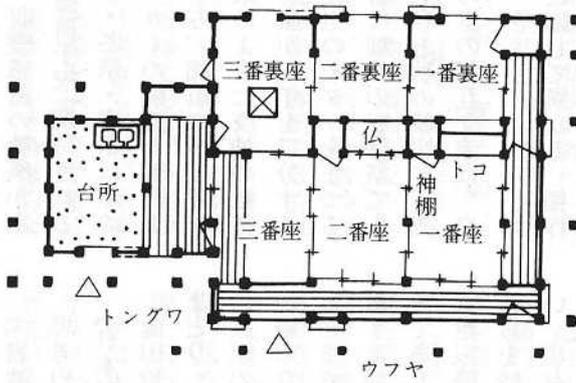


北船井型



前座敷三間取り

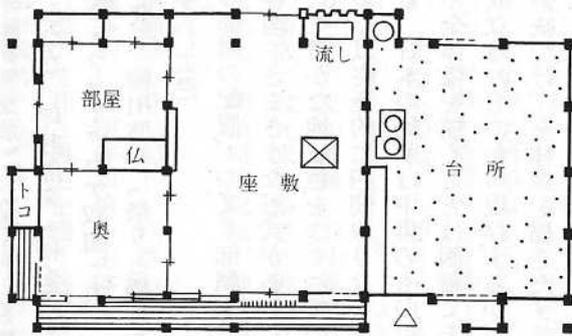
間取り



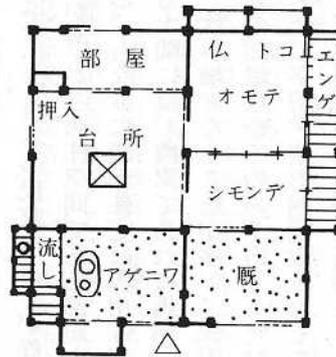
琉球の民家の間取り



撰丹型

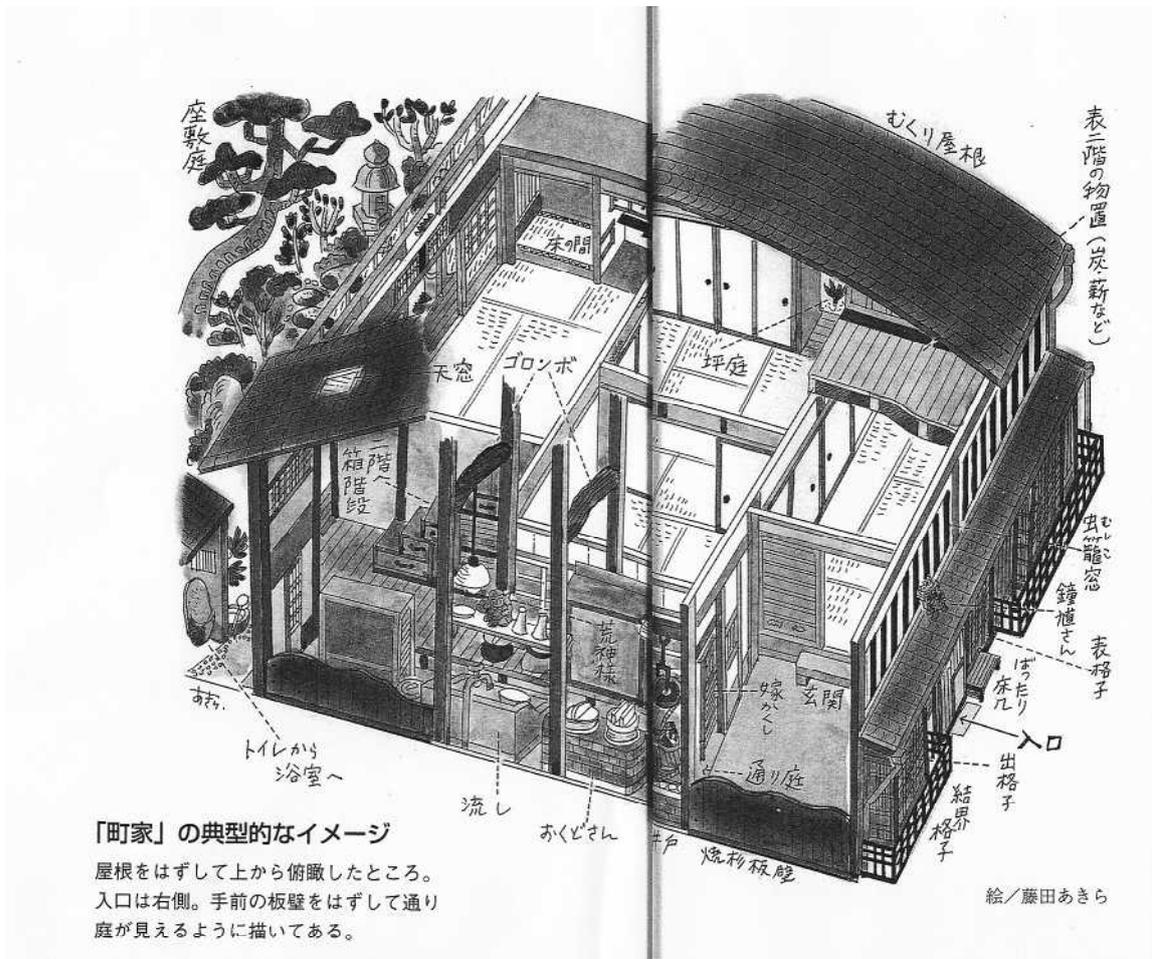


広間型三間取り

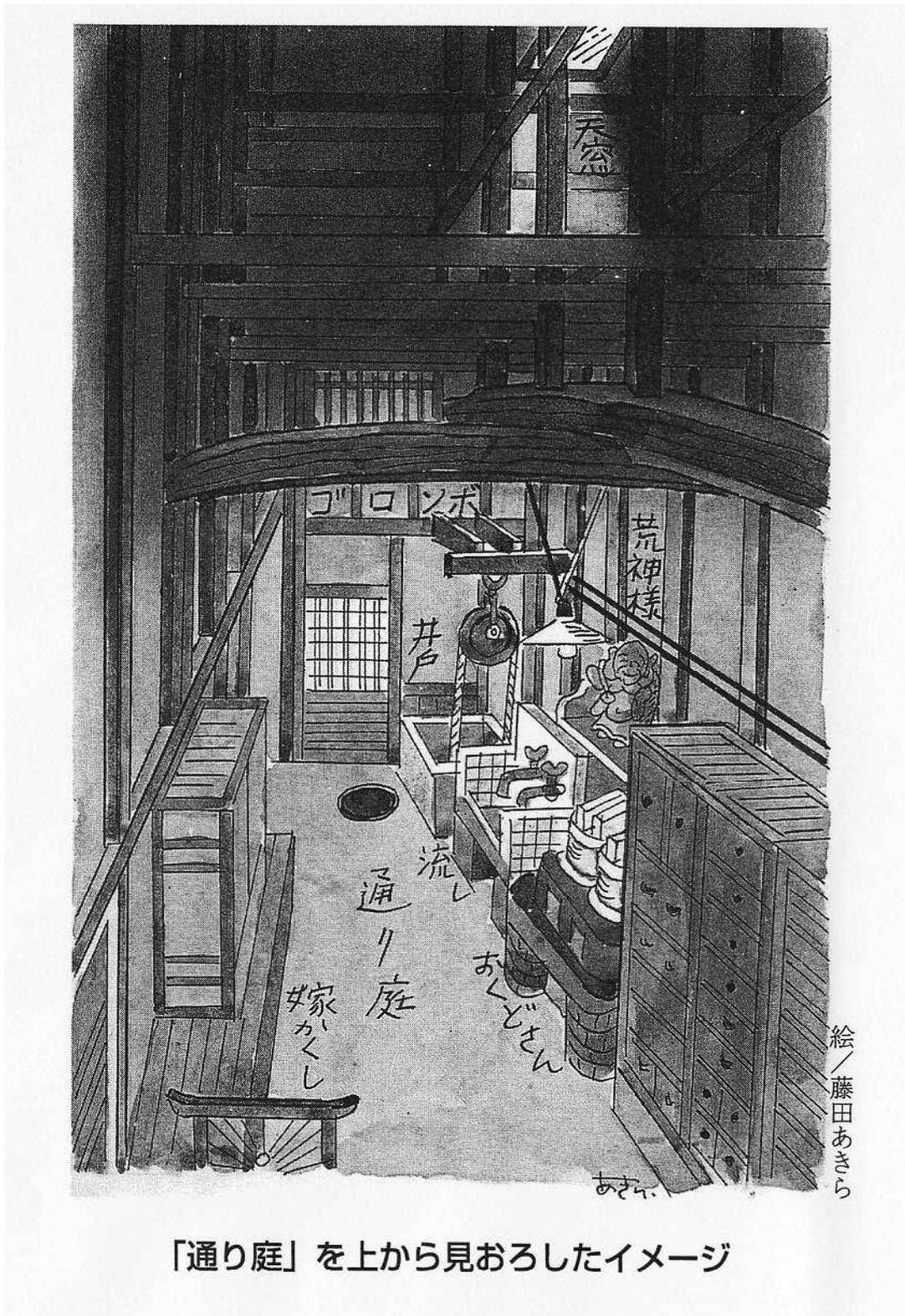


北山型

「日本民俗辞典」P498



町屋大工棟梁 山本茂「京町屋づくり千年の智慧」より



「通り庭」を上から見おろしたイメージ

町屋大工棟梁 山本茂「京町屋づくり千年の智慧」P81,82